トゲナシニセアカシヤのサシキ

安　藤　愛　次

Aizi ANDO : Cutting tests of *Robinia preudacacia spp.*

トゲナシニセアカシヤ類は生長がはやく、肥料木、飼料木あるいは薪炭材としての價値はひろくみとめられている。近ごろ採草地の改良を志ざす人々からトゲナシニセアカシヤの苗木、育苗およびそのふやし方についての問合せがおおいので、まずサシキについて試驗をしてみた。

1. 試驗の方法

青鳥トゲナシニセアカシヤ (*Robinia pseudacacia L. ver. bessoniana.*), 英國トゲナシニセアカシヤ (*R. p. L. var. umbraculifera*) およびイタチハギのナエギからとつた10cm内外のサシホについてホルモン処理の比較をした。すなわち水および0.01％アルファーナフタリンさく酸液に24時間つけたものと、さす前にルートンをきり口にまぶしたものである。4月15日にさしつけ9月3日に堀りとづた。このほか試驗方法は前にかかげた“「巨大なポプラ」のサシキ”の場合とおなじである。

2. 測定結果

サシホから芽がでて葉がひらいた本数を6月4日、24日、9月3日にしらべた結果は次表のようである。

第1表　新芽の発生率 (％)

樹種	無処理			ルートン			アルファーナフタリン		
	6－4	6－24	9－3	6－4	6－24	9－3	6－4	6－24	9－3
青鳥トゲナシ	89	92	59	95	98	57	88	93	37
英国トゲナシ	100	96	56	100	87	48	96	94	60
イタチハギ	98	98	100	90	98	94	79	100	100

9月に堀りとつてみると、新芽がでているものはすべて発根もさかんであつた。上表に示す

9—3の測定値は得苗率と一致する。堀りとつて新芽の長さ、発根箇所數をしらべたが、ホルモン処理による増減はみとめられず、1本あたり新芽の長さはニセアカシヤ類が25cm、イタチハギが50cm内外であり、平均の発根箇所数はニセアカシヤ類が3～4、イタチハギが5～7であつた。

上表からアルファ—ナフタリンの処理によつて、得苗率は青鳥トゲナシが減り、英國トゲナシがましたようにみえるが、いずれの差も有意（5％）のものではない。

アルファ—ナフタリン0.01％液に12時間つけておいて効果がいちじるしかつたという報告があり、24時間の処理が長すぎたのかもしれない。この試験においてルートンの効果は全然みとめられなかつた。

サシツケ間隔が8×8cmであつたため、発根し活着してから枯れたと思われるものがあつたので、サシキにより増殖をはかるばあいにはサシツケ間隔をひろくとる必要がある。

3. 參考文献

佐藤他：日林講演集. '42.　倉田：特用樹種 '49.　橘高他：日林誌. 31. 32. '49.　三井：畜産の研究. 3. '50.　兵頭：日林誌. 34. '52.　塩田：林試秋田支場研究時報 5. '53.